

# 埼玉の古代製鉄炉

鉄は人間の生活には欠かせないものの一つになっています。歴史の中では鉄を造ることは豊かさの象徴、権力の象徴でもありました。

一口に鉄を造るといっても鉄原料から製品として利用できる鉄にするためには、大きく分けて3つの工程があります。まず、鉄鉱石や砂鉄から鉄素材を造る製錬（製鉄）、製錬した鉄素材から炭素や不純物を取り除き製品に加工できる鉄素材にする精錬鍛冶（大鍛冶）、そうしてできた鉄素材を加工し製品にする鍛錬鍛冶（小鍛冶）です。それぞれの工程で炉を用いるわけですが、ここで取り上げる製鉄炉は製錬炉のことです。

日本で鉄が造られはじめたのは、古墳時代も終わりに近い6世紀頃と考えられます。もちろん弥生時代には、青銅器と共に鉄器がもたらされていますので、鉄素材を加工し製品を作る小鍛冶は弥生時代に遡るものと思われませんが、鉄素材自体を造るようになったのは古墳時代になってからです。それまでは、中国大陸や朝鮮半島から鉄素材を輸入し、それを加工して製品を造っていました。

では、埼玉県ではどうでしょうか。県内でもいくつかの遺跡から古代の製鉄炉が見つかっています。確認された製鉄炉（製錬炉）には2種類あり、1つは箱形炉と呼ばれるものです。寄居町箱石遺跡で確認されました。長さ2mほどの長方形の炉の両側に廃滓場（炉の操業の際スラグと呼ばれる鉄くずを取り出す場所）がつくものです。時期は8世紀のはじめ頃のもので、箱形炉は関西地方を中心に鉄鉱石を製錬したものが多く発見されています。現在のところ箱形炉が確認されているのは、箱石遺跡だけなので时期的な特徴なのか、工人の系統によるものなのかは解りません。

もう一つは、円形の豎形炉と呼ばれるもので、埼玉県内で確認されている古代の製鉄炉の大半がこの形です。伊奈町大山遺跡、ふじみ野市（旧大井町）東台遺跡、川口市猿貝北遺跡、深谷市（旧花園町）台耕地遺跡、深谷市（旧岡部町）菅原遺跡などから発見されています。時期は、最も古い

ものが東台遺跡で8世紀半ばから後半、他の遺跡は9世紀から10世紀です。いずれも砂鉄を製錬したものです。

豎形炉は斜面をU字形に掘りくぼめて作業場を作り、半地下式の直径1～1.5m、高さ1.5～2m（推定）の炉を作ります。炉内部の背面には大形の羽口を取り付けその背後に足で踏むふいごを設けているものが典型的なものです。

当館の常設展示室には、伊奈町大山遺跡で調査された製鉄炉が展示してあります。大山遺跡は昭和47年から調査が始まりました。旧石器から縄文時代、古墳時代、奈良・平安時代と多くの時期の遺構が確認された複合遺跡ですが、特に注目されたのがこの製鉄関連の遺構です。台地の斜面部に製鉄炉や製鉄の際に必要な木炭を焼く炭焼き窯が、台地の上面部には鍛冶炉と集落があり、砂鉄製錬から小鍛冶まで、一貫して鉄を生産した遺跡であることがわかりました。

展示室には炉と共に炉壁（炉内部にできた鉄素材を取り出す際に壊された炉の破片）やスラグ（製鉄の際にできる不純物を多く含んだ鉄くず）、大形の羽口（ふいごから送風するための管の先端）なども併せて展示しています。

古代製鉄の一部を垣間見られる展示になっていますので、是非一度ご覧ください。

（資料調査担当 田中正夫）



大山遺跡の製鉄炉展示風景

当館の南東方約1 km、大宮第2公園（見沼第7調節池）内に寿能泥炭層遺跡がある。昭和54年春、大宮東小学校の生徒が調節池の工事現場で土器片を採集し、当館に届けられたことが遺跡の発見、発掘調査のきっかけとなった。発掘調査は当館が担当し、同年秋から延べ1年6ヶ月にわたる調査が始まった。

現地は芝川の沖積低地にあたり、遺跡名が示すようにマコモやアシなどの湿性植物が完全に分解されずに堆積してできた泥炭層があり、この泥炭層に守られて多量の縄文時代木製品がのこっていた。赤や黒の色漆で飾られた弓や櫛、文様が彫刻された木製の鉢、矢柄の一部がのこる石鏃など大変重要な出土品で、当館の縄文時代コーナーの目玉展示品となっている。

寿能最下層式土器は、植物の茎をたばねて引っ掻いたような文様（条痕文）、腰の強いハケのような道具でなでたような文様（擦痕文）が内外面につけられているだけで、ほかに装飾的な文様がない。厚い土器が多く、特に底部は部厚く2 cmを超える例もある。このような特徴をもつ土器は、それまで知られていたどの縄文土器型式にも該当しない。調査当時、未知の土器の出現に関係者は「しばし目を疑った」と語っている。結局、これらの土器は縄文時代早期前半の夏島式土器の下層から出土するという調査所見が手がかりとなって、

早期以前の草創期（9500年以前～）に暫定されて現在に至っている。

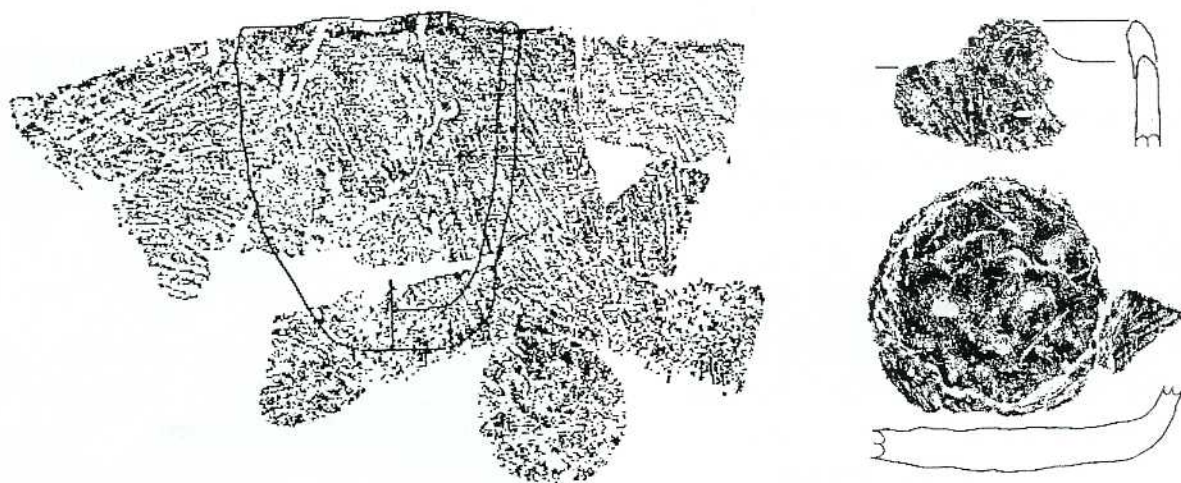
縄文時代草創期の土器群は、Ⅰ期：無文土器（出現期土器）、Ⅱ期：隆起線文系土器群、Ⅲ期：爪形文系土器、Ⅳ期：多縄文系土器群の変遷が明らかとなっているが、寿能最下層式土器はどの時期に該当するのか。

その後、栗島義明氏が寿能最下層式土器を再検討し、新たな手がかりを見いだした。口縁上に付けられた小さな半円形の突起（図右上）に着目し、この特徴などからⅣ期の編年位置を考えた（埼玉県立博物館『紀要』29、2004）。口縁が水平とならず、小さく波打つ特徴もⅣ期に見られることから、現状では草創期Ⅳ期に属すると考えるのが妥当であろう。

寿能泥炭層遺跡報告書（1984年刊行）に「寿能最下層式土器」の名称が登場してから25年。その後、同類の土器がまったく発見されず、学史に埋もれてしまいそうな状況となっている。

草創期の土器群は、早期以降と異なり、同一の土器型式が広域に分布するという特徴がある。Ⅱ、Ⅲ期の土器は東北北部から九州まで、Ⅳ期の土器は北海道から関西まで広がっている。寿能最下層式土器も以外と遠方から同類が現れるのではないかと、ずっと待ち続けている。

（主席学芸主幹 中島 宏）



「寿能最下層式土器」

## 「一番の特典は博物館を応援できること」という旗を掲げて～

博物館友の会が産声をあげたのは、博物館が平成18年4月1日に「埼玉県立歴史の民俗の博物館」になったのと同じ時でした。

そして、満3年。さきの三月末には会員数386名を数えることとなりました。博物館のご支援と会員の皆様のご協力の賜物と心よりお礼を申し上げる次第です。

その3年間、大きなイベントとして、初年度は講演会4、見学会3。平成19年度は講演会7、見学会7。20年度は講演会8、見学会7を行ってまいりました。

これらのイベントのあいだにも、学芸担当の方のお茶の会、古文書初歩講座、鎧の着装講座などを行い、また博物館の催しに呼応してミュージアムグッズフェアに協力させていただいたりもしてまいりました。

また、一方では会員のための会報「JUNO」を平成18年7月から現在にいたるまで毎月発行、一般の方への広報窓口としてのブログもっております。

いま、これらを振り返ってみて、これだけのことが単なる「友の会」として、よくぞ、やってこられたものだと、自分たちのことながら驚くほどです。



遺跡発掘見学会 桶川市前原遺跡

会の発足からこんなことをやろうと決めたとしたら、「とても出来ないから、会をつくるのもやめておこう」ということになったでしょう。



講演会「埼玉の仏像ベスト10」(林宏一氏)

私たち自身ですら、発足当初、考えられない、ある意味では「おそろしいこと」を行っているのです。

私たちには、他の友の会と違って博物館からは金銭の援助はいただきず、職員の派遣も行っていただきず～という条件が最初からありました。<それ以上の精神的援助をいただいて、それが友の会の基盤であることも明言させていただきますが～>

最初から博物館の主導があって、財源があって、人的な応援があれば、あるいは会員を多く獲得できて、現在以上の隆盛があったのでしょうか。

そうではないと思います。「自主的に」やらねばならないことが目の前にあったとき、個々のパワーは「か弱い」けれど、それが組み合わせられて、こんな「おそろしい」ことができたのです。

私たちにとって、最初の与えられた条件は、もはや、私たちの自慢です。

当時の高橋館長からいただいた会員数500のノルマ早期達成とか、さらなる博物館活動への応援の充実とか、まだまだ課題はいっぱいです。

しかしみんなで工夫し、協力してゆけば、できないことはないと思います。

「一番の特典は博物館を応援できること」というチャッチフレーズを、誇らしく、私たちを先導する旗と掲げて～。

(博物館友の会 会長 宮川 進)

